

## ショート版「永井荷風と山下清の街」本八幡を歩く

### 1. 日 時

2026年5月29日（金）14時頃～17時頃

### 2. 集合場所 改札口は東口ではなく、メインの中央口を出て右手（北）側

JR総武線本八幡駅改札口外集合、都営新宿線本八幡駅と京成電鉄本線八幡駅も至近

13:50集合 出発後に、遅れた場合はルートに従って追いついてください

昼食は済ませてからご参加ください 水筒など飲料は必要 小雨でも決行します

交通費は各自負担 資料は印刷してお持ちください 事前予約不要

### 3. 概略ルート おおむね 4.0km（歩いている時間 約60分）

JR本八幡駅北口出発 ⇒ サイゼリヤ発祥の地 ⇒ 八幡の藪知らず ⇒ 市川市

役所本庁舎内「永井荷風の書斎」 ⇒ 葛飾八幡宮 ⇒ 水木洋子邸 ⇒ 山下清の

ふるさと八幡学園跡地 ⇒ 永井荷風が通った銭湯「菅野湯」跡 ⇒ 源頼朝が戦勝

祈願した「白幡天神社」 ⇒ 荷風の散歩道 ⇒ 永井荷風終焉の地 ⇒ 荷風が最

後の食事をした「大黒屋」跡地 ⇒ 京成電鉄本社前 ⇒ JR本八幡駅北口解散

※ 初夏の暑い日と予想します。暑気払いの必要な方はご一緒しましょう。

歩きやすい服装と運動靴でご参加ください。途中の離脱も可能です。

### 東京桑野会歴史探訪散歩の会『永井荷風と山下清の街・本八幡を歩く』

探訪先	概 要
イタリアンレストラン「サイゼリヤ」発祥の地	JR本八幡駅北口前の商店街を歩くと、緑地に白抜きで「サイゼリヤ」と書かれた看板が見えてくる。創業者の 正垣(しょうがき) 泰彦会長(79)が大学在学中の1967年にオープンさせた初の店舗だ。今は「サイゼリヤ1号店教育記念館」になっている。レストラン店舗の営業はない。本八幡駅前北口再開発(2027年着工、2030年完工予定)により、近々にも取り壊される予定である。見るなら今でしょ！
(市川市八幡) 八幡の藪知らず 「平将門の首塚」説？	市川市八幡にある森の通称。古くから禁足地とされており、「足を踏み入れると二度と出てこれなくなる」という神隠しの伝承とともに有名である。解説板[要文献特定詳細情報]には、「不知八幡森(しらずやわたのもり)」と記されており、ほかに「不知森(しらずもり)」「不知藪(しらずやぶ)」とも称される。現在は不知森神社(しらずもりじんじや)の一角のみ立ち入りができる。水戸光圀(黄門様)が興味本位でここに入り、出られなくなった話は有名。心霊スポット。平安時代中期(940年)、平将門が常陸國で討ち死にして首を京都に持ち帰る際、ここを通った。将門の家臣6名が首を奪還しこの地にて守ったとの記録もある。鬼門となっている。
(市役所本庁内) 永井荷風資料室 書斎の復元	永井荷風(ながいかふう、1879年<明治12年>12月3日～1959年<昭和34年>4月30日)は、日本の小説家。本名は永井壯吉(ながい そうきち)。号に金阜山人(きんぷさんじん)、断腸亭(だんちょうてい)ほか。日本芸術院会員、文化功労者、文化勲章受章者。東京市小石川区(現在の文京区)出身。父・久一郎は官僚で大実業家だったが、荷風は落語や歌舞伎の世界に入り浸った。父は荷風を実業家にするために渡米させるが、荷風はアメリカ駐在を経てフランスにも滞在、同時代のフランス文学を身につけ帰国した。明治末期に師・森鷗外の推薦で慶応義塾教授となるが、江戸文化を無秩序に破壊しただけの幕末維新以後の東京の現状を嘆き、以後は、戯作者のように生きた。戦後は疎開地の岡山市から上京し、熱海経由で1946年<昭和21年>1月に市川市菅野258番地(現菅野三丁目17-10あたり)の従弟・杵屋五叟(きねやごそう邦楽家)一家の転居先に寄寓。1948年<昭和23年>12月に市川市菅野1124番地(現東菅野二丁目9-11)に瓦葺18坪の家を買い入れ、一人で移転。1957年<昭和32年>3月市川市八幡町四丁目1224番地(現八幡三丁目25-8)に転居。終焉の地。彼の日常生活は、日記『断腸亭日乗』に1917年(大正6年)9月16日から、死の前日の1959年(昭和34年)4月29日まで綴られている「自伝小説」といべき傑作である。荷風37歳～79歳の日常生活を細かく書いた日記。

<p>永井荷風の続き</p> <p>1879年12月3日生 1959年4月30日没</p>	<p>小説家だけあって自伝は多い。日記の他、彼の日常を知る資料は多々ある。17歳で初めて荒川区千束にある吉原にて遊郭遊びを覚え、遊女や芸妓に熱を上げた。父は大実業家で羽振りが良く、経済的には恵まれていた。1898年から新進作家として作品を発表。1908年(29歳)、『あめりか物語』を発表。翌1909年の『ふらんす物語』と『歓楽』は風俗壊乱として発売禁止の憂き目にあうが(退廃的な雰囲気や日本への侮蔑的な表現などが嫌われたようである)、夏目漱石からの依頼により1909年12月13日から1910年2月28日まで東京朝日新聞に『冷笑』が連載され、その他『新婦朝者日記』『深川の唄』などの傑作を発表するなど荷風は新進作家として注目され、鷗外、漱石や小山内薫、二代目市川左團次など文化人演劇関係者たちと交友を持った。1910年、森鷗外と上田敏の推薦で慶應義塾大学文学部の主任教授となる。教育者としての荷風はハイカラーにボヘミアンネクタイという洒落な服装で講義に臨んだ。内容は仏語、仏文学評論が主なもので、時間にはきわめて厳格だったが、学生には好評だった。「講義は面白かった。しかし雑談はそれ以上に面白かった」と佐藤春夫の言。収入を得ると益々女遊びにふけり、父親にこっぴどく叱られてもやめることはなかった。父親は強引に同じ商家の娘と結婚させた。1912年9月、湯島の材木問屋の娘・斉藤ヨネと結婚させられたが、父親が1913年1月に亡くなり家督を継ぐと翌月2月に離婚した。5ヶ月も持たなかった。1914年8月に熱を上げていた新橋の芸妓八重次と結婚するも半年で離婚。以後結婚することはなかったが、病気入院時の看護婦や通いの女中にも手を出した。吉原にも足しげく通い、晩年には友人達に「自分が死んだら遊女たちと同じ三ノ輪の浄閑寺に埋葬してくれ」と言っていたが、叶わなかった。浄閑寺には荷風の筆塚が建立された。墓地は雑司ヶ谷。実子はおらず、従弟・五叟の次男(永光、1944年養子入籍)を迎え家督を継ぐ。現在はその子(荷風の孫)永井壮一郎が永井家を継いでいる。著作権は放棄。</p>
<p>(市川市八幡) 葛飾八幡宮</p>	<p>葛飾八幡宮(かつしかはちまんぐう)は、千葉県市川市八幡にある神社で、八幡宮の1つ。旧社格は県社。「八幡」の町名の由来となる場所である。寛平年間(889年-898年)に宇多天皇の勅命により石清水八幡宮を勧請して建立されたと伝えられている。下総の国を守護する総鎮守として崇敬されている。武神であることから平将門、源頼朝、太田道灌、徳川家康、下総国守護千葉氏、上総氏、安房国の大名里見氏など関東武士や、令制国の房総三国(下総国・上総国・安房国)からの信仰を集め敬われた。また、永井荷風、幸田文、幸田露伴、伊藤左千夫、宗左近、大岡信など多くの文化人に拝され、親しまれた神社として知られる。参道には『随神門』=神仏分離以前は別当法漸寺の仁王門。市川市指定有形文化財。</p>
<p>(市川市八幡) 旧・八幡学園跡</p>	<p>山下清が12歳の時、1934年5月に母子家庭で知的障害と反抗的だったため預けられた施設。1928年(昭和3年)12月12日に設立され現在も実在する「福祉型障害児入所施設」。八幡四丁目から移転し、現在は市川市本北方三丁目に現存する。「八幡学園」という名称は同じで現在18歳以下の障害児60名が暮らしている。</p>
<p>山下 清</p> <p>1922年3月10日生 1971年7月12日没</p>	<p>東京府東京市浅草区田中町(現:東京都台東区日本堤 1、2 丁目辺り)に、父・大橋清治、母・ふじの長男として生まれる。翌年の関東大震災によって田中町一帯が焼失すると、両親の郷里である新潟県の新潟市(現:中央区)白山浦に転居する。その2年後(3歳ごろ)、風邪からの重い消化不良により命の危険に陥り、一命は取り留めたが軽い言語障害と知的障害の後遺症を患う。一家は1926年(大正15年)には浅草に戻った。1932年(昭和7年)、父の清治が脳出血で他界すると、母・ふじは再婚する。養父は酒癖が悪く、母子(子供3人)は夜逃げし杉並区方南町(現・杉並区方南)にある母子家庭のための社会福祉施設「隣保館」へ転居。このころ、母・ふじの旧姓から山下清を名乗るようになる。長男清は暴力を振るうようになり、知的障害もあり手に負えなくなって、母が八幡学園に預けた。八幡学園での生活で「ちぎり紙細工」に出会い、没頭していく中で才能が磨かれた。清の素質は1936年(昭和11年)から学園の顧問医を勤める精神病理学者・式場隆三郎の目に留まり、式場の指導を受けることで一層開花していく。八幡学園の園児たちの貼り絵に注目した早稲田大学講師戸川行男により、彼の才能が大きく認められ早稲田大学での展覧会や銀座の画廊にて個展を開催。1939年(昭和14年)1月には、大阪の朝日記念会館ホールで展覧会が開催され、清の作品は多くの人々から賛嘆を浴びた。八幡学園には長く在籍したが、1940年(18歳時)突如学園を脱走し、1940年(昭和15年)11月から1955年(昭和30年)6月までの間、放浪の旅を繰り返した。半年ごとに放浪しては千葉に戻る生活を繰り返したという。この記録は『放浪日記』(1956年&lt;昭和31年&gt;)にまとめられた。なお、この時のいでたちとして、リュックサックを背負う姿がテレビドラマなどで描かれている。小林桂樹、芦谷雁之助、芦屋小雁、ドラングドラゴンの塚地武雅が名演技をした。</p>

(市川市八幡) 水木洋子邸 1947年完工	水木洋子(みずきようこ、本名:高木富子、1910年(明治43年)8月25日-2003年(平成15年)4月8日、脚本家)が、55年以上居住した。没後に市川市に寄贈され、市の文化財として管理され、月に2-4回公開。1946年(昭和21年)から市川市民。荷風とほぼ同時期に移住。
(市川市東菅野) 菅野湯	2020年12月まで運営していた銭湯。現在は建物も解体し、駐車場になっている。『断腸亭日乗』にもたびたび登場する、荷風の通った銭湯である。すがのゆ。
(市川市菅野) 白幡天神社	白幡天神社(しらはたてんじんしゃ、しらはたてんじんじゃ)は千葉県市川市菅野にある神社。1180年(治承4年)、源頼朝が安房国に旗揚げしたとき、菅野の地に白旗を揚げたことから白幡宮と名付けられたと伝えられる。その後、1584年(天正12年)正親町天皇の代に本殿再建の記録がある。1871年(明治4年)に菅原道真を合祀してから、社名に「天」の字が加えられ、白幡天神社と呼ばれている。現在の本殿は、1880年(明治13年)に造営され、拝殿・幣殿は、1961年(昭和36年)に造営された。祭神は、武内宿禰、菅原道真、応神天皇である。
(市川市八幡) 荷風の散歩道 荷風終焉の地 大黒屋のカツ丼	1957年(昭和32年)3月市川市八幡町四丁目1224番地(現八幡三丁目25-8)に転居。終焉の地。2年間の住まいだが、現在も永井壯一郎氏(荷風の孫)が管理している。死の前日1959年4月29日の夕食はいつもの大黒屋のカツ丼と日本酒1合。翌朝に通いの女中が遺体を発見した。胃潰瘍による吐血で吐しゃ物による窒息と推定。未消化のカツ丼が認められた。大黒屋は2017年6月30日にて閉店廃業し、予備校・市進学院に所有が移転した。
(解散)	京成電鉄本社前を通って、JR本八幡駅前にて解散。 もしよろしかったら、暑気払いでも軽く。

以上

永井荷風が常食としていた『大黒屋のカツ丼と日本酒一合』(荷風セット¥1,500、2017年当時)



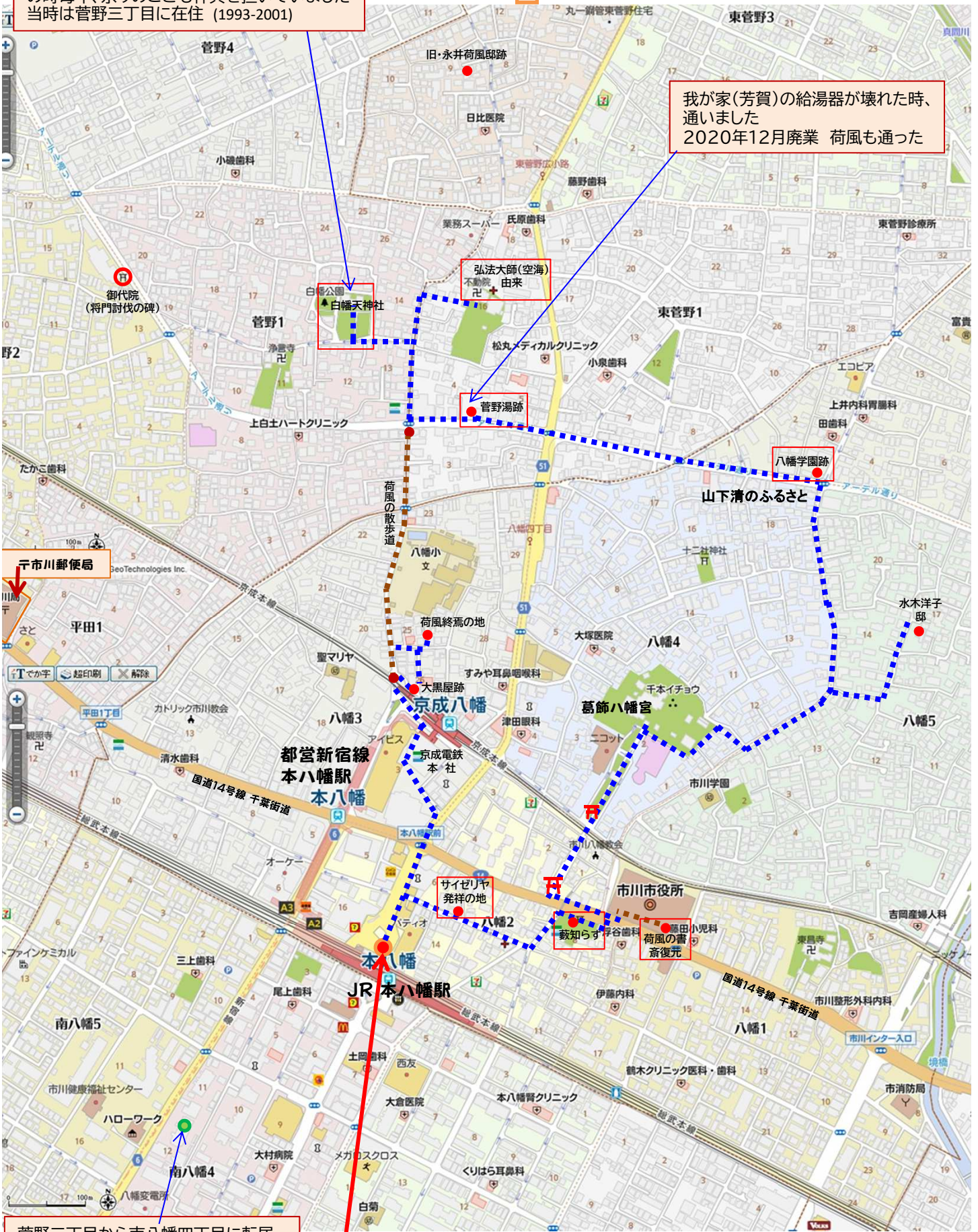
# 散歩ルート概略図

芳賀の現自宅は  
このすぐ先です

私(芳賀)は、市川市民となって  
1993年8月から数え 33年と  
なります

我が家(芳賀)の子供達が小学生《菅野小学校》  
の時毎年、祭りのこども神輿を担いでいました  
当時は菅野三丁目に在住 (1993-2001)

我が家(芳賀)の給湯器が壊れた時、  
通いました  
2020年12月廃業 荷風も通った



菅野三丁目から南八幡四丁目に転居  
芳賀10年間在住 (2001-2011)  
私個人の話はどうでもいいか？

出発地点&ゴール地点(JR 本八幡駅北口) 同一です